漢文の教材研究

――『史記』の場合――

森野繁夫

『史記』は此の何年間か、二年生の後期で扱い、現在は「項羽本紀」を読んでいる。また此の二・三年間は漢文研究会で「伍子胥列伝」、さらに「廉頗藺相如列伝」を取り上げた。その間、『史記』を読む際の心得のようなものを、いくつか知ることができたが、そのうちで最も大切なことと思われるのは、「対象とする部分だけを読むのではなく、それと同じ事柄、あるいは関係のある事柄を、『史記』の他の部分ではどのように扱っているか、に注意しながら読んでゆく」ということである。

例えば、よく出される例であるが、「項羽本紀」の最初の部分にある、項羽が始皇帝の行列を観た時の言葉、

秦始皇帝游会稽、渡浙江。（項）梁与籍俱観。籍曰「彼可取而代也」。梁掩其口、曰「毋妄言、族矣」。梁以此奇籍。

は、「高祖本紀」の、

高祖常繇咸陽、縦観。観秦始皇帝、喟然太息曰「嗟乎、大丈夫当如此也」。

という、高祖の人柄を表す話と読み合わせることによって、その性格・人柄が一段と明らかになる。

このように、他の列伝、あるいは同じ列伝の別の場所に書かれている事柄と比べあわせつつ読んでゆくことによって、当面する部分だけを読んでいたのでは到底わからない内容を知ることができる。また、当然わかるはずと考えて作者――司馬遷の説明していないことで、今の私達にはよくわからないことについても理解できることがある。更に、司馬遷の創作意図――人物造形や場面構成のねらい――が見えてくる場合もある。これらは『史記』の教材研究をする時に、気をつけておかねばならないことと言えよう。以下、具体的に例を挙げながら説明を加えることにする。

一　「項羽本紀」から

(1)　樊噲の虚言

鴻門の会で、主君沛公を救わんものと宴席にとび込んできた樊噲が、項羽を真正面に見すえながら弁舌をふるう場面がある。すなわち、

夫秦王有虎狼之心、殺人如不能挙、刑人如恐不勝。天下皆叛之。懐王与諸将約曰「先破秦入咸陽者、王之」。今沛公、先破秦入咸陽、毫毛不敢有所近。封閉宮室、還軍霸上、以待大王来。故遣将

守関者、備他盗出入与非常也。
労苦而功高如此、未有封侯之賞。而聴細説、欲誅有功之人。此亡秦之続耳。竊為大王不取也。

樊噲の此の論は、まことに堂々たるもので、さすがの項羽も、「未だ以て応うるあらず、曰く〝坐せよ〟と」という対応しかできなかった。しかし、樊噲の言葉のうち、

今、沛公は先に秦を破りて咸陽に入り、豪毛も敢えて近づくところ有らず。宮室を封閉し、軍を霸上に還して、以て大王の来たるを待つ。

についてみるに、沛公は項羽の来るのを、秦の宮殿に手をつけることなく、ひたすら待っていたかのようであるが、実はそうではなく、「留侯世家」によればそこに至る過程は次のごとくであった。

沛公入秦宮、宮室帷帳、狗馬重宝、婦女以千数。意欲留居之。樊噲諫沛公出舎。沛公不聴。
良曰「夫秦為無道。故沛公得至此。夫為天下除残賊、宜縞素為資。今始入秦、即安其楽。此所謂助桀為虐。且忠言逆耳、利於行。毒薬苦口、利於病。願沛公聴樊噲言」。
沛公乃還軍霸上。

さらに「蕭相国世家」によれば、咸陽を陥れた時の漢軍の様子は、

沛公至咸陽、諸将皆争走金帛財物之府分之。

という状態であったというから、秦宮のいくつかは、漢の兵士たちによって荒らされてしまっていたにちがいない。

したがって樊噲の、「今沛公、先破秦入咸陽、豪毛不敢有所近。封閉宮室、還軍霸上、以待大王来」という言葉は、主人沛公をかばっての虚言なのである。

次に、

故に将を遣して関を守らしめしは、他盗の出入と非常とに備へしなり。

ということについても、すでに「項羽本紀」の「鴻門の会」前夜の場面で、張良に「誰か大王の為に此の計を為す者ぞ」と問いつめられた沛公が、「鯫生、我に説きて曰く『関を距ぎて諸侯を内るるなくんば、秦の地は尽く王たるべきなり』と。故に之を聴せり」と白状しているが、その詳細については「高祖本紀」に次のごとく記されている。

或説沛公曰、「秦富十倍天下、地形彊。今聞、章邯降項羽、項羽乃号為雍王、王関中。今則来、沛公恐不得有此。可急使兵守函谷関、無内諸侯軍、稍徵関中兵以自益、距之。
沛公然其計、従之。

函谷関に守備兵を置いたのは、関中の地を我がものにせんとする沛公が、項羽ら諸侯の兵を入れまいとしてのことであり、決して「他盗の出入と、非常とに備え」てのことではなかった。

樊噲は、これら沛公に都合の悪い事実は全てかくして、ぬけぬけとうそを言い、相手の非ばかり責めたてて、大功ある沛公に封侯の賞のあるべきことを主張する。

こうして話の裏がわかってくると、まことしやかに沛公の無実を主張する樊噲の心のうちと、それを側できいている沛公・張良の様子――ウン、ウンと、うなずきながらきいていたことであろう――

が推しはかられて、この場面がひときわ鮮かに眼の前にうかびあがってくる。

(2) 策士范増の心のうち

「鴻門の会」に臨む范増の決意は、「ここでどうしても沛公を殺しておかねば」というものであったが、項羽の心がわりによって、事は失敗に帰した。その時、范増は、

嗟、豎子、不足与謀。奪項王天下者、必沛公也。吾属、今為之虜矣。

と、天を仰いで嘆息する。この時の范増の心のうちは、この部分だけを読んでもよくわかるのであるが、その前日のこと――項羽の軍は、函谷関にいる沛公の兵を撃って関中の地に入り、沛公の左司馬曹無傷の「沛公欲王関中、使子嬰為相、珍宝尽有之」という密告によって大怒した項羽は「旦日饗士卒、為撃破沛公軍」と、沛公撃破の決心をする――その時の范増の言葉を思いうかべる時、一段とよく理解できる。范増はその時、項羽に次のように言った。

沛公居山東時、貪於財貨、好美姫。今入関、財物無所取、婦女無所幸。此其志不在小。吾令人望其気、皆為龍虎、成五采。此天子気也。急撃、勿失。

「沛公は確かに天下をねらっているし、また天子としての資質もそなえているようだ。絶対に撃ちもらすことのないように」と、(それらはおそらく范増のうそなのであろうが) かんでふくめるように言ってきかせる、その范増の心のうちには、「ここまできたからには、項羽にどうしても天下を取らせたい」という、項梁・項羽二代に仕える策士としての願い、生きがい、さらには意地があったにちがいない。

そうして、その計謀が項羽の優柔不断な性格によって失敗に帰した時、范増は「項王の天下を奪う者は、必ず沛公ならん」と嘆息するのである。その「項王の天下」という言葉には、項梁―項羽を輔佐し献策を続けてきた己の苦心、それによってここまで築きあげてきた項王の天下をむざむざ……、という范増の無念の思いが込められているであろう。

その後、漢の三年四月、滎陽に追いつめられ、食糧の欠乏した漢王は、楚に和議を申入れる。この時、范増は「漢は与みし易きのみ。今、釈して取らざれば、後に必ず之を悔いん」と、ここでけりをつけてしまうように項羽に説く。そうして羽もその気になるが、漢の陳平の策謀にのってしまって、范増が漢に内通しているのではないかと疑い、その軍権を次第に奪ってゆく。項羽の疑心に気づいた范増は大怒して、

天下の事、大いに定まれり。君王自ら之を為せ。願わくは骸骨を賜わりて卒伍に帰せん。

と、訣別の語を残して去ってゆく。

「鴻門の会」「滎陽の戦い」と、項羽は范増の意見に、最初は耳を傾け、承知するのであるが、結局は范増の言うことはきかない。こと「項羽本紀」には二つの例しか挙げられていないが、おそらく二人の間には何度も同じようなことがあったのではなかろうか。そのたびに范増は「この次には必ず羽を説得して、我が謀りごとを通し、

天下をしっかりと項羽のものに」と気をとりなおしては、次の計謀を考えていたろう。しかし、項羽の「うらぎり」が何度もくりかえされれば、さすがの范増も我慢しきれない。「天下の事、大いに定まれり。君王、自ら之を為せ。願わくは骸骨を賜わりて卒伍に帰せん」という最後の言葉は、かくして吐き出された。

司馬遷は策士范増について、項羽本紀の中に三度だけ登場させているが、その三つの場面を通して、項羽に天下を取らせることを唯一の念願としていた策謀の士范増の、執念と失意のすがたを描いているように思う。

なお「鴻門の会」での范増の言葉「唉、豎子、不足与謀」の「豎子」は誰を指しているか、ということがよく問題になるが、表面は、沛公撃殺に失敗した項荘を、実は項羽を指すのであろう。范増は口の中でぶつぶつ言ったのではなく、張良のさし出した玉斗を受けとって地に置き、剣を抜いて撞きこわし、天を仰いで、かなり大きな声で言ったはずである。目の前にいる項羽を「豎子」よばわりすることは、いかに項梁の代から仕えていたとはいえ、臣下としてどうも不自然に思われる。

このことは、滎陽での最後の言葉、「天下の事、大いに定まれり。君王、自ら之を為せ」についてもいえよう。「天下はほぼ楚のものと定まった。あとのことは君王ご自身でなさいませ」が表面の意味、実は「天下はほぼ漢のものと定まった、……」ということである。或いは范増は項羽に対して、いつもこういう言い方で、言いにくいことを話していたのかもしれない。

二　「淮陰侯（韓信）列伝」から
——酈食其の死について——

漢の三年（前二〇四）、韓信はいわゆる「背水の陣」によって趙を破ったのち、漢王の命令で東のかた斉に軍を進めたが、斉の国境の町平原の対岸まで来た時に、「漢王は酈食其（れきいき）をして、已に説きて斉を下さしむ」という情報が入った。韓信は征斉の軍を止めようとした。しかし范陽の謀士、蒯通は、

将軍受詔撃斉。而漢独発間使下斉。寧有詔止将軍乎。何以得毋行也。且酈生一士、伏軾掉三寸之舌、下斉七十余城。将軍将数万衆、歳余乃下趙五十余城。為将数歳、反不如一豎儒之功乎。

「斉を討つことを中止せよとの詔はありましたか。無い以上は中止することはできない。それに、三寸の舌をふるって、一人で斉の七十余城を下した酈生に、このまま名を成させてもいいのか」と、信をけしかけた。

信は蒯通の言を然りとしてその計に従い、遂に河を渡る。そうしてそのまま兵を進めた信は、漢と手を結ぶことになったために備えを解いていた斉の歴下（済南・歴城県）の軍に襲いかかってこれを破り、一気に斉都臨淄（りんし）に攻め寄せた。

ここで次のような疑問が生ずる——この時、酈食其が既に斉王田広に説いて漢に帰服する約束をさせていたのに、漢王は何故、韓信の討斉の軍を止めなかったのか。

この疑問は、酈食其伝の、この時の事情を記した次のような部分を参考にすれば、ある程度わかってくる。すなわち、漢王の命を受

けた酈食其に説得され、楚と手を結ぶことを止めて漢に付くことを承知した斉王田広は、――

　罷歴下兵守戦備、与酈生日縦酒。
　淮陰侯、聞酈生伏軾下斉七十余城、廼夜度兵平原、襲斉。
　斉王田広、聞漢兵至、以為酈生売己、廼曰「汝能止漢軍、我活汝。不然、我将烹汝」。酈生曰、「挙大事不細謹、盛徳不辞譲。而公不為若更言」。
　斉王遂烹酈生、引兵東走。

まず、韓信の軍を止めず、酈生を見殺しにした漢王の気持から考えてみよう。

酈食其が漢王に、この度のことを説いた時、次のようなことを言っている。

「方今、燕・趙已定、唯斉未下。今田広拠千里之斉、田間将二十万之衆、軍於歴城。諸田宗彊、負海阻河、斉南近楚、人多変詐。足下雖遣数十万師、未可以歳月破也。臣請得奉明詔説斉王、使為漢而称東藩。」（酈食其伝）

「斉は強く、しかも楚に近く、人に変詐多し」ということは、酈生に言われるまでもなく漢王は十分に承知していたことであろう。したがって漢王としては、たとえこのたび漢に付いたとしても、何時また楚に味方するかもしれない斉を、ここで徹底的にたたき、再起不能にしておく必要があったのである。漢王はこのように考えて、酈生が殺されることがわかっていながら、あえて韓信の軍に征斉中止の命令を出さなかったのであろう。

一方、このとき酈食其はどのように考えていたか。斉王に「汝、能く漢軍を止むれば、我、汝を活かさん。然らずんば、我は将に汝を烹んとす」と言われた時、彼は「大事を挙ぐるには細謹せず、盛徳は辞譲せず」と答えた。これは「鴻門の会」に於て樊噲が、宴席を脱け出した時に項羽に辞去の挨拶をしなかったことを気にする沛公に言った言葉、「大行は細謹を顧りみず、大礼は小譲を辞せず」と同じ考え方によるものである。天下平定という大業を成しとげるためには、「細謹」「小譲」を無視することも仕方のないことだ、という考えを、樊噲も、そうして酈食其も持っていた。酈生は、このような考え方にもとづいて、漢王の無情なやり方を、戦国の常として仕方のないことと認めていたようである。

一方また、漢王の冷酷な性格・人柄から見て、酈生みごろしは不自然なことではない。その冷酷さについては次のような記録がある。

漢の二年（前二〇五）、項羽が斉を伐ちに行っているすきに、漢王は楚の都彭城を陥れたが、急ぎ軍をかえした項羽の反撃を受けて敗走する途中のできごと、

　楚騎追漢王。漢王急、推堕孝恵・魯元車下。滕公常下収載之。如是者三、曰「雖急、不可以駆。奈何棄之」。於是遂得脱。（項羽本紀）

同じ事柄は「夏侯嬰（滕公）伝」に、

　漢王急、馬罷、虜在後。常蹶両児、欲棄之。嬰常収、竟載之徐行、面雍樹乃馳。漢王怒、行欲斬嬰者十余、卒得脱、而致孝恵・魯元於豊。

とある。追手からのがれるために、実のわが子を車から何度も蹴おとしたという。

また漢の四年、漢王が項羽と、広武で対峙していた時のできごと、

当此時、彭越数反梁地、絶楚糧食。項王患之、為高俎、置太公其上、告漢王曰「今不急下、吾烹太公。」漢王曰「吾与項羽、俱北面受命懐王、曰『約為兄弟。』吾翁即若翁。必欲烹而翁、則幸分我一杯羹。」項王怒、欲殺之。項伯曰「天下事、未可知。且為天下者不顧家。雖殺之無益、祇益禍耳。」項王従之。（項羽本紀）

項羽が、囚えていた太公（漢王の父）を俎上にのせて、「すぐに降伏しなければ、烹殺してしまうぞ」と言ったのに答えて、「私とおまえは兄弟の約束をした仲。太公はおまえにとっても父親だ。おまえの父親を烹たら、私にもスープを一杯分けてくれぬか」と言ったという。

天下を取るという大目的のためには、我が子、我が父を犠牲にすることも辞さない漢王劉邦であった。それも、天下万民のために、一身の耐えがたいつらさをおさえて、というのではなく、平気な顔で、というように、右に挙げた文章は読みとれるのである。

漢王のこのような性格・人柄を、酈生は十分に知っていたであろうから、斉において、このたびのようなことがあるかもしれないと、予想はしていたのではあるまいか。

かくて酈生は、「汝能く漢軍を止むれば、我は汝を活かさん。然らずんば我は将に汝を烹んとす」と迫る斉王に、「而公、若の為に言を更えず」――わしは、おまえのために、言ったことを変更しようとは思わぬ」と言って、従容として死んでいった。

以上のように、他の個所に記されている事柄をあわせ考えてくるとき、漢王は何故、韓信の討斉の軍を止めなかったのか、また、酈食其は漢王のとった態度についてどのように考えていたのか、という問題に対する答えが出てくる。それにしても、戦国時代の人々、――大望を果すために「細譲」「辞譲」ぬきで、全てを冷酷に処置する漢王、見殺しにされるかもしれないことを知りつつ自ら敵地に乗り込んでゆく酈生――の生き様、その心を知るとき、司馬遷のえがこうとした内容が、心に重くこたえてくる。

三　「伍子胥列伝」から

――司馬遷の創作――

「史記」は、伝えられている歴史の記録を、忠実に整理し、まとめただけのものではない。司馬遷の目的は、人間の、この世界の真実を追求し、それを記録し後に伝えることにあったようである。そのために、事実をふくらませた箇所、つまり司馬遷の創作した部分がかなり存在するように思われる。その例として、「伍子胥列伝」の中から二つの場面をとりあげてみる。

(1)　「其の尸を出して、之を鞭つこと三百」

伍子胥は楚の人であるが、費無忌の讒言により、平王のために父と兄とを殺され、諸国をさすらったのちに呉に落ちつき、そこで復讐の機会を待つ。十六年間の苦心ののち、呉軍を率いて楚の都郢に入るが、その時の様子を本伝では、

伍子胥求昭王、既不得。乃掘楚平王墓、出其尸、鞭之三百、然後

已。

と記す。しかし、この事について「左氏伝」「公羊伝」には何も記されておらず、「穀梁伝」（定公四年）にだけ、「撻平王之墓」とあり、そうしてそこには、「尸」ではなく、「墓」と記されている。

また、その他の書物にも、

○伍子胥、親射王宮、鞭荆王之墳三百。（「呂氏春秋」首時篇）
○闔閭伐楚入郢、鞭荆平王之墓、舍昭王之宮。（「淮南子」泰族訓）
○撻平王之墓。（賈誼「新書」耳痺篇）

のごとく、伍子胥が鞭ったのは「尸」ではなく、「墓」である。

更に「史記」でも、

○呉兵入郢、辱平王之墓、以伍子胥故也。（楚世家）
○昭王亡、伍子胥、鞭平王墓。（十二諸侯年表）
○伍子胥、鞭平王之墓。（季布伝）

のごとく、いずれも平王の「墓」を鞭つと記し、「尸」を鞭つとはいわない。

思うにこれは、子胥の平王に対する怨みのはげしさを表すために、「伍子胥列伝」だけ、「墓」を「尸」にかえたものであろう。

(2) 伍子胥の諫言

呉王夫差は越王句践を会稽山に破り、やがて矛先を北に向けて斉を伐つ。その間、伍子胥は「越こそ、呉の腹心の疾」であることを、夫差にくりかえし諫言する。すなわち、

① 越王句践を会稽山に追いつめた時

越王句践、乃以余兵五千人、棲於会稽之上。使大夫種厚幣遺呉太宰嚭以請和、求委国為臣妾。呉王将許之。
○伍子胥諫曰「越王為人能辛苦。今王不滅、後必悔之。」
呉王不聴。用太宰嚭計、与越平。

② 斉を伐つことについて

(イ) 其後五年、而呉王聞斉景公死、而大臣争寵、新君弱、乃興師、北伐斉。
伍子胥諫曰、「句践食不重味……
呉王不聴、伐斉、大敗斉師於艾陵。……益疏子胥之謀。

(ロ) 其後四年、呉王将北伐斉、……
伍子胥諫曰、「夫越腹心之病……
呉王不聴、使子胥於斉、……

そうして、このようにしつこく諫言をくり返す子胥に腹を立てた夫差は、讒臣伯嚭のそそのかしもあって、子胥に「屠鏤の剣」を与えて自殺させる。

ここで先ず気になるのは、斉との戦い（艾陵の役）のことであるが、哀公十二年の「左氏伝」によれば、それは夫差の十二年のことで、この時期、斉との戦いは此の一度だけである。しかし子胥伝では「其後五年」「其後四年」と、二度、斉と戦ったことになっている。これはいったいどうしたことか。おそらく子胥が諫言をくり返し、夫差に次第に疎んじられてゆく過程を、「子胥諫曰〜」「呉王不聴」を重ねることによって描かんとした、作者の工夫によるものであろう。

次に問題になるのは、子胥の諫言の態度についてである。「越王句践世家」では、子胥が諫言をくり返す場面が次のごとく記されて

いる。

① 王が艾陵の戦いに勝って帰った時

呉王弗聴、遂伐斉、敗之艾陵、虜斉高・国以帰。讓子胥。子胥曰「王毋喜」。王怒。子胥欲自殺。王聞而止之。

② 越が粟を貸してくれるように申し入れてきた時

呉王欲与。子胥諫勿与。王遂与之。越乃私喜。子胥言曰「王不聴諫。後三年、呉其墟乎」。

「句踐世家」では、夫差は子胥にかなり遠慮しており、逆に子胥の態度は大きく、夫差を見下したようなところがみえる。これに比べれば「伍子胥列伝」での子胥は、誠意をつくして諫言をつづけ、それが聴きいれられないで、最後には非業の死をとげる、あくまでも悲劇の主人公として描かれている。

伍子胥を悲劇の主人公として描こうとする司馬遷の意図は、子胥の最期の描写からもうかがえよう。すなわち「句踐世家」では、夫差から「属鏤の剣」を賜った時の様子が、

子胥大笑曰「我令而父霸、我又立若。若初欲分呉国半予我、我不受已。今若反以讒誅我。嗟乎、嗟乎。一人固不能独立」。

と、あくまでも夫差を見下して、「大笑」しながら、「おまえ一人ではやっていけるはずもないのに」と、最後の言葉を述べるが、「伍子胥列伝」では、

伍子胥、仰天歎曰「嗟乎、讒臣嚭為乱矣。王乃反誅我。我令若父霸。自若未立時、諸公子争立。我以死争之於先王、幾不得立。若既得之、欲分呉国予我。我顧不敢望也。然今若聴讒臣言、以殺長者」。

と、「天を仰いで歎じ」つつ、夫差の忘恩を責めている。

要するに「伍子胥列伝」では、子胥はあくまでも悲劇の主人公としてえがかれており、「句踐世家」にみられる、それまで夫差にかけてきた恩義を背景としての、夫差を見下したような子胥の態度は、全くうかがえない。これは作者司馬遷の脚色と考えざるをえないところである。

司馬遷は「伍子胥列伝」の主要テーマを、「怨みに生き、そうして怨みに死んだ、子胥の悲劇の生涯」と定めて、全ての資料をその線にそって並べ、それに手を加えているのである。そのために「句踐世家」の子胥とは異なる、別の子胥像が出来上がったとしても、それはそれでよい。それぞれの伝において、彼が心に思いえがいているような人物像が表現でき、それによって、自分の考えている「人間の真実のすがた」、さらには「人間の世界の真実」が表現できれば、それでよかったわけである。

このようにみてくると、たとえば「項羽本紀」における「項王の悲壮な最期」の場面、また、「廉頗・藺相如列伝」の、藺相如が「臣が頭、今璧と倶に柱に砕けん」と言って秦王と対決した場面、「五歩の内、相如請う、頸血を以て大王に濺ぐを得ん」と秦王に迫った「澠池の会」の場面なども、同じように司馬遷の創作、あるいは誇張ではないかと思われる。

司馬遷の創作、ということに関連して、次に「記述の順序の変更」ということについて述べてみよう。司馬遷は、場面の盛りあがりを大切にして、それよりも後に起きた事件を、くりあげて前に持って

くることがある。すなわち「項羽本紀」の次のような場面がそれである。

漢王、使御史大夫周苛・樅公・魏豹、守滎陽。周苛・樅公謀曰「反国之王、難与守城。」乃共殺魏豹。楚下滎陽城、生得周苛。項王謂周苛曰「為我将、我以公為上将軍、封三万戸。」周苛罵曰「若不趣降漢、漢今虜若。若非漢敵也。」項王怒、烹周苛、并殺樅公。

漢王之出滎陽、南走宛・葉、得九江王布、行収兵、復入保成皐。

漢之四年、項王進兵囲成皐。漢王逃、独与滕公、出成皐北門、渡河走脩武、従張耳・韓信軍。

漢の三年から四年にかけての事で、時に漢王は成皐・滎陽の間で項羽と攻防をくり返しており、形勢は漢軍に不利であった。

この記事のうち、楚が滎陽城を降して周苛と樅公を殺したのは、「高祖本紀」によると、高祖が南方の宛・葉から成皐城に入った後のことになっている。すなわち、

項羽聞漢王復軍成皐、乃復引兵西、拔滎陽、誅周苛・樅公、而虜韓王信、遂囲成皐。

のごとく。「秦楚之際月表第四」によってまとめると、次のようなことになる。

三年四月　楚囲漢王滎陽
　　七月　王出滎陽
　　八月　周苛・樅公、殺魏豹
　　？月　王走宛・葉、復入保成皐
四年三月　漢御史周苛入楚（死）
　　？月　項王囲成皐

つまり「項羽本紀」では、滎陽城が陥ちて周苛が殺されたのを、漢王が宛・葉を経由して復び成皐に入った時より前においている。滎陽が陥落したのは、漢の四年三月のことである。楚は、漢王が復び成皐に入ったのを知り、西進して先ず滎陽を陥し、それから成皐を囲んだわけである。

司馬遷は恐らく、周苛と樅公が「反国の王、与に城を守り難し」として、時には楚に、時には漢に付く魏王豹を殺した、その臣の道を通そうとする行為に関連させて、「我が将と為らば、我は公を以て上将軍と為し、三万戸に封ぜん」という項羽の誘いを拒否して漢に命を捧げた周苛、そうして樅公の事件を、挿入的にそれに続けたものであろう。そのために周苛らの死は、事実よりも数か月はやいものとなった。年時の正確な記録という点からいえば誤りとなろうが、周苛らの忠義を称揚せんとした司馬遷の意図は、それによって達せられたわけである。

なお漢王が滎陽を脱出してのち、南のかた宛・葉に走った理由は、「高祖本紀」を見れば明らかとなる。

漢王之出滎陽、入関収兵、欲復東。袁生説漢王曰「漢与楚、相距滎陽数歳、漢常苦。願君王出武関。項羽必引兵南走。王深壁、令滎陽・成皐間且得休、使韓信等輯河北趙地、連燕・斉、君王乃復走滎陽、未晚也。如此、則楚所備者多、力分。漢得休、復与之戦、破楚必矣。」

漢王従其計、出軍宛・葉間、与黥布行収兵。

項羽聞漢王在宛、果引兵南。漢王堅壁、不与戦。

南に兵を移動して、中央部の滎陽・成皐、南方の宛・葉、それと韓信・張耳の戦っている河北の三方面に、楚の兵を分散させようという、袁生の策に従ったものである。

四　結　語

以上、「史記」を広く読むことによって、その記述のうらに込められている深い意味が明らかとなり、あるいはまた、司馬遷の意図が見えてくる、という例をいくつか挙げたが、それらはいずれも同じ時期、同じ時代における事柄についてであった。次の段階としては、時代を異にして存在した人物、生起した事件について、司馬遷がそれらをどのように関連させ、いかなる扱い方をしているかを見きわめなければならないであろう。おそらくは「史記」百三十巻が、司馬遷の思想にもとづき、時空を越えて緊密に組み合わされているのであろうが、その解明には、なお多くの時間がかかりそうである。

（本学教授）